

美術の窓(131)

展示のしかた パート 2

大和文華館館長 浅野秀剛

昨年4月刊行の美術の窓(128)は「展示のしかた」という題にした。その時の結論として「展示のしかたに絶対はない」と書いた。この作品はこういうふうに表示するのが一番良い、というものはない、という意味でそう述べたのである。今回は、その続編である。

前回も書いたが、それぞれの美術作品は、鑑賞のされ方というものを想定して制作される。掛軸は床の間に掛けられ、屏風は座敷に置かれて、浮世絵版画は手に取って、油彩画は額装して室内に掛けられ、彫刻は室内外に設置され、置物は床の間などに置かれて鑑賞されることを念頭に制作されている。建築彫刻は、建物を荘厳するために、あるいは建物の性格を主張するために制作され、各種工芸品は用途に応じて使われるために制作されている。それらのものが、美術品という括りでまとめられ、美術館などで展示されることになる、「展示のしかた」が問題となるわけである。この秋、いくつかの美術館に行き、また何か所かで作品を見る機会があった。それを順に記し、再度「展示のしかた」を考えてみたい。

9月11日、東京の印刷博物館に行き、VRシアターで、バチカン宮殿にあるシステリーナ礼拝堂の壁画を見せていただいた。高精細で撮影した360度の拡大映像を、私自身が鳥になったように自在に接近して鑑賞することができる。もし、バチ

カンを訪れたとしても、鳥ではない私たちは、同じようにすべての壁画に接近して鑑賞することは不可能である。最新のデジタル技術がそのような鑑賞のしかたを可能にしたということになる。近年、仏像を例にとれば、あらかじめ撮影した映像を用い、前後左右のみならず、(スクリーン上ではあるが)上下からも見るようになった。それだけではない。像内納入品がある場合は、そのX線画像なども見るのできるのである。人間の目では不可能なレベルまで拡大した映像を見ることも可能である。それは、制作者の想定を超える鑑賞のしかたということになる。さらに、劣化する前の当初の彩色を復元した映像を作ることもできるようになった。

11月15日、奈良県立美術館の特別展「大古事記展」を鑑賞する。出土品から現代美術、また美術品とはいえないものまで陳列された「ごった煮展」はそれなりに楽しめた。その足で、「はならあと」の奈良きたまち工場跡の展示を見に行った。「はならあと」は町家で現代美術を展示するプロジェクトで、今年で4年目となる。その工場跡は、長寿会細菌研究所の社屋として大正14年に完成した工場だそう、そこに3人の作家の作品が展示されていた。怪しげな工場跡の存在感に対抗しなければならぬ展示品はかわいそうであった。最終日の前日ということもあり、人がかなりいたのは喜ぶべきことであろう。翌

日は「はならあと」の大和郡山・旧川本邸の展示を見に行った。そこでは4人の作家が展示していた。工場跡よりは作品と会場に親密性があったと思うが、一つ一つの部屋にある作品をのぞいていくという感覚は残る。私自身は、遊女屋であった家屋の構造が、江戸・吉原のそれと近似しているのに最も惹かれた。

11月26日、あべのハルカス美術館の仕事でイギリスのノリッチに出張。その翌日、イーストアングリア大学内にあるセインズベリー視覚美術センターを訪れた。そのセンターは種々の機能を持つ総合施設であるが、中核は美術館である。その常設展示室を見て、非常に驚いた。数千㎡はあろうかという広さの巨大な一室なのである。まるで、メッセの会場にいるような雰囲気、会場は屋根のないブースで仕切られ、それが連なっている。全体を見渡せるのがユニークである。各ブースは、時代別、地域別、作家別などにはなっていない、アフリカ美術、ギリシャ・ローマ美術やピカソ、ヘンリー・ムーアなどの作品が混在している。おそらく、時代や地域を超えた普遍的なテーマを設定し、それに包含されるものを一つのブースに集めているということであろう。センターには、図書館や研究室もあるが、ガラスを多用し、可視化を徹底している。

29日、ロンドンのロイヤル・アカデミーで開催している、ドイツの

作家、アンゼルム・キーファー(1945~)の大回顧展に出かけた。大人の入場料が15.5ポンド、日本円にして2880円、今、円安であることを考慮しても高い。しかし、大型展示室をフルに使ったインスタレーション(その空間に合わせて制作した作品)などを見ると、このレベルの大型特別展を実施し、主に入場料で採算を合わせるとなると、止むをえないかもしれないと思う。会場は半月後に終了するということもあってか、大分混んでいた。

キーファー展を見た日にロンドンを発ち、12月に入ってこの原稿を書いている。やはり、「展示のしかたに絶対はない」という思いを強くしている。それとともに、美術館で展示するにしても、町家で展示するにしても、「作品のもつ力」が最も重要であり、それが弱ければ、展示をどんなに工夫してもそれなりのものにしかならない、ということを再認識した。展示のしかたを考えるということは、作品に潜在する力をどうすれば引き出すことができるかを考えるということに繋がる。作品に力があり、かつ、適切な展示をすれば、対価を払ってくれる人が存在するというのも、やはり信じたい。

今の新しい技術が、そのままでは見ることでできないものまで見せることが可能になったということの意味については、もう少し考えてみたい。

季刊 美のたより No.189

平成27年1月9日

発行 大和文華館